

与え・受ける喜びを味わう人生を送る事になった。

著者ディケンズは、『物語とは人の世の中への贈与であり、クリスマスこそあらゆる物語の中でも、もつともすばらしい物語が、人々に送られてしかるべき季節』であると考えていると中沢新一は言う。『純粋な自然の贈与』

四週もある待降節は、私にたっぷりとその時間を与えてくれる。そのプロセスは、待降節・主の降誕だというのに、なんだか四旬節・復活とオーバーラップする。

クリスマスといえば、聖ニコラス由来することを知られて久しいが、実は冬の北欧には古くからの異教の信仰があった。全ての命の源である太陽の力を弱める長く厳しい冬は、死者の霊が生者の世界に飛び交う季節と考えられ、その死者の霊に人々がお供え物をする事によって、気持ちよく去つてもらおうとした。気持ちよく去つた死者の霊は、翌年の豊饒を約束してくれた。こうして、死者と生者が贈り物を与え合う季節だったよ

うである。

人類最大の贈り物、それは「イエス・キリスト」だというのはキリスト者の信仰であるが、人々の歴史の中で政治・経済・文化が複雑に入り混じつても、クリスマスには、それを超える神の「贈与」があることを、毎年のように確認させられるのは私だけだろうか。ベトナム戦争の「クリスマス休戦」は、この時期になると毎年のようにテレビ番組で見られる。感動を覚える一方、個人に下さる神の贈与は、必ずしも見た目にきらきらと輝かない、痛みを伴うものだったりする。しかし、皮肉の中にも神からの無償の贈り物は私に「生」をくれる。

だから、毎年繰り返すのだ。

「メリー・クリスマス！」

『信仰と私』

ステファノ 葛島 千代治

私は長崎県五島市福江で生まれ、幼児洗礼を授かり、小学二年生で初告解、初聖体の秘蹟を受け、中学一年生の時に堅信式を授かりました。堅信式を受けた当時のことは、今でもとても良い思い出となっています。

堅信式に向けて、一年間、毎週土曜日の午後、教会の教え部屋で堅信式の心得と公教要理を教わりました。同学年の十数名と一緒に、公教要理の一冊の中からどこを抜粋して問題を出されても答えられるよう、一心不乱に暗記したものです。

その努力が報われ、一人の落伍者もなく全員がキリストの子「一人前の信者」として認めてもらい、多くの信者の方々に祝福していただきました。一緒に頑張ってきた仲間と互いに喜び合ったことが、昨日のことのように思い出されません。

しかしながら、高校卒業と同時に五島を離れて上京してからは、都会の環境に惑わされ、また仕事や生活に追われてしまい（自分に甘いですね！）何年もの間、信仰を怠り、迷える羊になっていました。

いつも頭の片隅で、信仰のことが気になっていたのですが、なかなか教会に足を運ぶことが出来ずにはいません。

そんな折、母の死がきっかけとなり、牧野神父様の温かい御心に触れ、また今までの罪の許しを受け、御聖体をいただくことが出来ました。また家内も洗礼と堅信を授かり、私の胸につかえていたものが消え、今は充実した毎日を過ごしています。

これからもカトリック信者としてさらに信仰を深め、また城北橋教会の一員として、皆様と共に歩んでいければ幸いです。

神に感謝